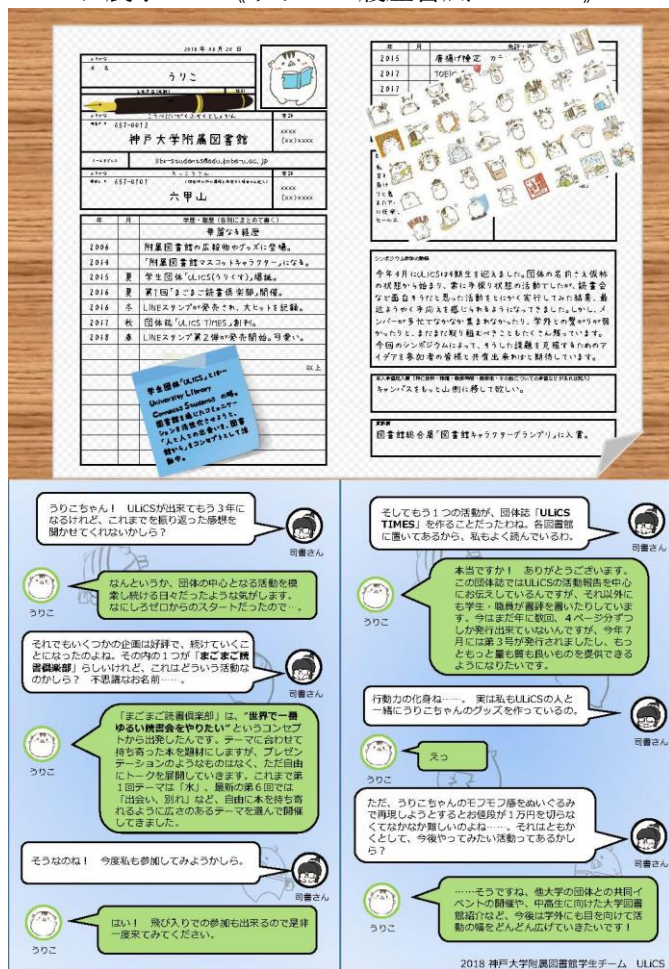
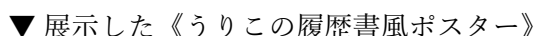


Vol.4 Dec. 2018

大学図書館学生協働
交流シンポジウム
in 広島大学

1日目に基調講演、各団体の事例発表、ポスターセッション、2日目にグループごとに新しい企画や活動の悩みを話し合うワークショップが行われた。印象に残ったのは、帝京大学の共読サポーターズだ。学園祭での古本市や、図書館の蔵書を検索できるOPAC上の本のレビューなどの興味深い活動を紹介していた。他団体においても学生と図書館をつなげるために様々な活動に取り組んでおり、発表では活動の工夫や努力について知ることができた。私たちは神戸大学附属図書館のキャラクターうりこの履歴書風ポスターを作成し、ポスターセッションで活動紹介を行った。ポスターの前で立ち止まって説明を聞いてくれた方からは、私たちが不定期で開催している「まごまご読書倶楽部」でどのような本が紹介されているか、うりこのLINEスタンプがどのようなものかなどの質問があった。企画名を工夫したり、キャラクターを利用したりすることが注目を集めることにつながっており、これらのことで学生に図書館へ興味を持ってもらうきっかけを作ることができるのではないかと感じた。



シンポジウムの参加者は大学図書館職員、サークルのメンバーとして図書館にかかわる学生、アルバイトとして図書館業務を行う学生と様々であった。大学図書館をより良い場所にしていこうとする人々が、それぞれの立場から図書館について考え、話し合うことで、各団体の活動をさらに深めていくことができる。10月開催の「まごまご読書倶楽部」のテーマは「おすすめしたくない本」であった。これはシンポジウム内で他グループが紹介していた「裏ビブリオバトル」をもとにしている。通常のビブリオバトルは読みたい本に投票するのだが、裏ビブリオバトルでは最も読みたくない本を選ぶ。人にすすめられない本を選ぶことで、通常の読書会とは異なる本を知ることができる企画となった。このように、今回のシンポジウムで得た企画のアイデアや活動に関する悩みの解決方法などをULiCSに合う形にして活動につなげ、神戸大学の図書館を学生にとってより身近に感じられるものにしていきたい。

(文学部1年 岸本)

完説
論語

「孔子と愉快な仲間たち」
井波律子訳
『完訳論語』
岩波書店
2016

A simple line drawing of a person with a large head and small body, sitting at a desk and reading an open book. The person has a triangular nose and small eyes. A pen and a small rectangular object are on the desk. The entire scene is enclosed in a large orange oval.

遠足～誠光社・下鴨納涼古本まつり～

8月11日土曜日、我々ULiCSの職員2名、院生・学生合わせて3名で、（去年から）恒例の下鴨納涼古本まつりに「遠足」として行ってきた。下鴨納涼古本まつりとは、京都古書研究会が主催する三大古本まつり（春の古書大即売会、下鴨納涼古本まつり、秋の古本まつり）のうち、最も大きい古本まつりで、下鴨神社の糺の森に様々な古書店が出品した約80万冊の古書が並ぶ。三大古本まつりは、それぞれ5日間程度開催され、ブースはたくさんの古書好きで賑わう。

今年は、ULiCSでの「遠足」ということで、古本まつりの前に河原町にある「誠光社」へ立ち寄った。誠光社は、2015年に新たにオープンした新しいシステムを導入した本屋で、出版社から直接本を仕入れることを特徴としている。住宅街の中に、こじんまりとした木造の店内に、店長自らが選んだ書籍が並び、眺めていて飽きることがない。店の奥には、マトリョーシカやロシア語のタオル、バッグなどをはじめとするロシアグッズがあり、可愛い雰囲気だった。

▼京都河原町の本屋「誠光社」



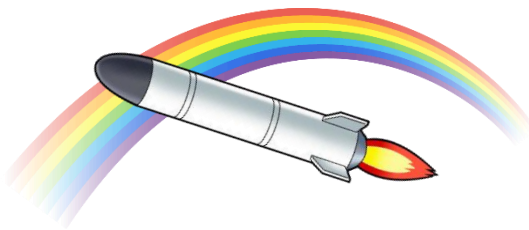
ある人は買い物をし、またある人は古本まつりへのモチベーションが高すぎて何も買わずに誠光社を後にした。カフェで腹ごしらえをし、いざ古本まつりへ！と思いきや、金魚すくいをしたり、川を渡ったりと寄り道をしたため、下鴨神社に到着した頃には、正午を大分回っていた。途中で休憩がてら下鴨神社にてお参りやおみくじをしながら、大量の古本の中からお気に入りの一つを見つけるため、各々大奮闘した。結局、去年と同様、全てのブースを見終えることはできず、タイムオーバーとなってしまったが、お互いの戦利品を見せ合うと、その人らしいものや意外なもの、自分も興味をそえられるものなどがあった。お盆前の猛暑の中、糺の森で、お気に入りの古書探し。ULiCSのメンバーだからこそ成し得た遠足であった。（文学部2年 畠田）



▲下鴨納涼古本まつりの盛況の様子



Gegenstandsbereich und Existenzialismus —— または人は 如何にして科学を捨てるのか



大学に入って最初の学期、教育学の講義で「大学生の5人に1人は、自分の専攻が合っていないと感じている」と先生が話したとき、私はどこか他人事のような同情心しか覚えなかった。当時の私にはまだ、自分がその1人であるという自覚はなかったのだ。

それにしても、専攻が合わないというのはどういう感情なのだろうか？ マルクス・ガブリエルの用語を借りれば、その人の興味や問いが、専攻する学問の対象領域 (Gegenstandsbereich) に含まれていないからと説明出来るかもしれない。学問の対象領域、即ちその学問がカバーする事象の範囲には必ず限界がある。古典小説はこれから発射されるミサイルの軌道をタイロン・スロースロップのようには予測出来ないし、逆にシュレディンガー方程式は私や貴方が存在する理由については無力だ。自分にとって何の意味もない勉強ほど辛いものはない。そのため、自分にふさわしい対象領域を見抜けなかった2割は様々な方法でそのズレを修正しようとする。

エルネスト・サバトというアルゼンチン作家を例に見てみよう。彼は作家になる以前は、なんとキュリー研究所に在籍したこともある優秀な物理学者だったが、ある日、「実存の危機」と宣言して科学界から去ってしまった。その後彼は文学の世界へ身を投じ、カミュも絶賛するような名作を書いた。彼以外にも、歴史の中には自らに適した対象領域を求めて世界をさまよって歩いた人々の足跡が刻まれている。サバトと同じように人文学の世界に漂着した人間だけを見ても、カート・ヴォネガット(化学)、カール・ヤスパース(法律)、池澤夏樹(物理)などなど、おそらく数え上げればキリがないだろう。

彼らは誤った道を選んだために貴重な青年期を浪費してしまったのだろうか？ 必ずしもそうとは言えないだろう。放浪の旅にはそれなりのメリットもある。異分野を渡り歩いた人物の表現形式には、ある種の独特さが生まれることが多い。言ってしまうと、対象領域を多く持つということは(自分の異色な経歴を誰かと出会う度に説明しなければならないが)、それだけで他者との差異になる。

迷った…。



とはいえ、ただ居を定めず転々とするだけでは、器用貧乏になりかねない。たとえ能動的な選択であっても、対象領域の変更は熟慮の上で行った方が良い。大学に入り直すという選択肢を取るならば回り道になるし、幸いなことに日本では就職という便利なりセットボタンも用意されている。そして、仮に最適な対象領域の内側に身を置くことが出来ても、それで貴方を取り巻く諸問題が全て解決する訳ではないというのも心に留めて置くべきだろう。それはまた別の話だ。なぜなら、世界は存在しないのだから。

(国際協力研究科修士2年 小林〔物理〕)

ULiCS Times 読者アンケートのお願い (プレゼントあり)

おかげさまで ULiCS Times は創刊1周年を迎えることができました！ 2年目の次号に向けて、ULiCS では皆様からのご意見をもとに、今後の紙面をより充実させていきたいと考えております。つきましては、下のQRコードから簡単なアンケートにご協力ください。回答は匿名で集計され、所要時間は3分程度です。また、2019年1月6日(日)までにご回答いただいた方の中から抽選で4名様に、うりこグッズ(ふせん、クリアファイル、缶バッジ)をプレゼントいたします。ぜひご回答ください！
※本アンケートおよびプレゼントの対象は神戸大学の学生・教職員の方のみです。



うりこグッズ(イメージ)

アンケートURL: <https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/ulics-times-questionnaire/>